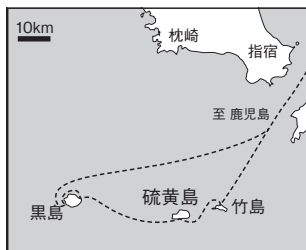


株式会社いおう

地域資源を活かす事業を展開

— タケノコ、椿油、トレーラーキャンプ

株式会社いおう取締役 棚次 理



硫黄島：竹島、黒島とともに鹿児島県で最も小さな自治体である三島村の中心となる島。面積11.62km²、周囲19.1km、人口115人（令和2年3月1日現在）。大名竹や黒毛和牛などが生産され、ヨットレースやジャンベ教室など独自の島おこしで知られる。

鹿児島から四時間、活火山の島

硫黄島——太平洋戦争の激戦地、小笠原諸島の硫黄島ではない。鹿児島本土と屋久島の間位置し、北に鹿児島本

土南端の開聞岳、南に屋久島や口永良部島の島影を望む。鹿児島市とを週四往復する「フェリーみしま」が就航し、

硫黄島まで片道二二〇キロメートル、約四時間かかる。人口は一一五名ほどで、小さな商店がひとつあるが、食堂や病院はない。村役場は鹿児島市内に立地している。

島にある活火山の影響で酸性雨が降り、育つ作物は少ない。活火山の硫黄岳は、中世から近代まで良質の硫黄鉱を

産出したが、戦後、硫黄は化学合成によって安価で手に入るようになったため、鉱山はその歴史に幕を閉じた。以来、島の人口はおおむね減少傾向にある。

このように硫黄島では、産業に多様性がない。現在の基幹産業は、戦前から行なわれている畜産で、他の産業は育っていない状況だ。

四人で株式会社を立ち上げ

株式会社いおう（以下、いおう）は、この閉塞した状況を変えるため、二〇一七年七月に設立された。きっかけはその前の年、村が雇用創出のための補助金を活用し、観光を含む地域資源の見直しを決定、民間の調査会社に依頼して竹林や椿林、地魚とsoの利用法などについて調査をした（三島村産業統合会社組織設立検討等計画策定事業）。住民への聴き取りを行ない、島の資源を活かした組織づくりの計画が固まり、住民と行政で構成する協議会が立ち上がった。

調査の結果、魚は船の運航頻度や輸送コストから品質維



硫黄島港に入港するフェリーみしま。港内は海中の噴気で褐色に濁っている。

持が難しいため、協議を重ねて竹林と椿林を活かそうと決まった。当初は硫黄島の住民全員が会社に関わる合資会社の設立を考えていたが、一部から不安の声があがり、結果的に希望者が参加できる株式会社となった。村が大半を出

資するが、役員を派遣することなく株主総会などの場で、指導助言することとなった。

ところが、会社の立ち上げには四名しか手が挙げられなかった。起業という慣れない選択肢に尻込みされたのかもしれない。限られた人的・物的資源——いおうをとりまく状況は、はじめから「ないないづくし」だった。

しかし、これまでに大きな産業が興

っていないなかったことで、竹林や椿林といった地域資源が残っていた。いおうは、困難な状況を逆手に取って、その可能性に注目している。

現代は生活様式が多様化して、大量生産・大量消費時代の要求にそぐわないものごとも、豊かな生活の要素として見直されている。規格外・少量生産の商品や、観光分野では有限で唯一性のある体験にも光があたってきている。活火山のおかげで島には温泉が多く、見応えのある奇抜な名勝が多々ある。訪れた人は「こんな迫力のある風景が見られるとは」と喜ぶ。ジオガイドなどの活動も行なわれている。

組織の構成、島の振興に対する想い

会社は代表取締役と取締役三名、つまり立ち上げ時に出资した四名からなる。現在、代表取締役を務める安永孝氏は、タケノコと椿油の魅力を見直すプロジェクトを行なっている。彼はメンバー唯一の島出身者で、島への想いも強い。自らアイデアを出して事業に取り組んでいる。

取締役の三名はいずれも「いまま」の船長、今別府秀美氏は、いままで島になかったキャンプingtレーラーの貸し出し事業を手がけている（後述）。また、米村由美氏が経理を担当、二〇一七年に島に移住した私は庶務を担当し、これらのプロジェクトをサポートしている。

いおうが取り組む三つの事業

① タケノコ事業——竹林オーナー制度で収量増を目指す

島で育つリュウキユウチクの若芽は「大名タケノコ」と呼ばれ、味は濃いのがエグみがなく非常に美味である。旬は五月から六月の前半にかけて。いおうでは、住民が収穫したものを買い取り、出荷している。二〇〇〇年から安永代表らが村役場とともにタケノコを青果として首都圏へ売り込み、販路拡大に努めてきた。その結果、豊洲市場で高値で取り引きされるなど、知名度は徐々に定着してきている。

とはいえ、生産者の高齢化で竹林が荒れ始め、生産基盤の保持が課題となっている。タケノコの採り手も減っている。また、輸送コストが高い点、収穫に手間がかかる点、安定供給できない点が不利に働いている。

現在、いおうは村から竹林を借り、村が雇った専門家の指導を受けながら効率的にタケノコが収穫できるよう整備を進めている。いおうとしては、その上で竹林オーナー制度の導入を試みている。島外のオーナーに竹林を貸し出し、タケノコを自由に収穫できるようにするというものだ。荒れた



島にはヤブツバキが繁茂している。



硫黄島特産の椿油。純度が高いと評判。

竹林の有効活用、整備による収量の増加、青果販売以外の利益の獲得などが期待されている。

② 椿油事業——高品質の商品を島内生産

島では従来、住民が収穫した椿の実を地区会が買って鹿兒島へ出荷し、本土の工場で搾油、商品化してきた。分析によって、島の椿油は純度の高さが明らかになっている。

いおうでは今後、島で精油して、質の良し悪しを判別し、品質に見合った価値づけを行なおうと考えている。現在、島に搾油の機械を新設し、試験を行なっている。実の乾燥不足で油に濁りが出るなどの課題が洗い出されてきており、品質向上にむけた試みをつづけている。



キャンプ場に据え置くトレーラー。風雨が強くても、この中なら快適に過ごせる。

③ 観光事業——キャンピングトレーラーの貸し出し

交通の便が悪い、宿の収容人数に限りがある、食堂がないなど、硫黄島は観光面で不利な状況にある。村営フェリーは日に一回しか寄港しない（運航しない日もある）ため、観光には必ず宿泊が伴う。キャンブという選択肢もあるが、一般向けではないだろう。旅行者は、こうした条件のなかで旅程を組まなければならない。そして多くが来島を断念する。

こうした事情から、いおうではキャンピングトレーラーの貸し出しを準備している。これまで取りこぼしてきた客層を島に呼び込もうという計画だ。

トレーラーは、キャンブスペースを間借りして据え置く。すぐそばが海岸で立地は申し分がない。海風は強いが、車中なら快適に過ごせるはずだ。計七台のう

ち、五台がキャンブ初級者向けの居住性の高い据え置き型、二台は中級者向けで温泉などにも移動できるタイプ。移動型は見た目こそコンパクトだが、展開すれば一五分で炊事場・ベンチ・ダブルベッドつきの快適な空間をこしらえることができる。

基本料金は、一台一泊一万二〇〇〇円（据え置き型は一人三〇〇〇円）と利用しやすい価格帯にした。サービスを差別化することで民宿（食事込みで八〇〇〇円程度）と競合しないよう配慮している。

食事のサービスは無いが、冷蔵庫と電子レンジが備わっているし、レトルト食品の購入ができる。魚を捌くなど本格的な料理には炊事棟を使ってもらう。近くの体育館には洗濯機があり、シャワーも使える。温泉で入浴も可能。トイレは近くの施設で利用でき、ポータブルタイプもある。

当初は安価な簡易宿泊施設を複数建てての計画だった。しかし、資材の輸送コストや、酸性雨で頻繁にメンテナンスが必要な島の特長事情から、設置コストが安く、故障しても交換が容易なトレーラーの導入が検討された。増設もたやすく、要望にあわせた改造も比較的容易だ。思い切れば車両を一新してリニューアルもできる。準備と片付けに手間がかからず、人手が不足している会社の事情にも馴染む。整備されていてストレスフリーな観光地は日本中にある。この島の極端な不便さを目の当たりにすると、海外に来たような気分になるかもしれない。しかし、絶景とともに、

この状況を異国情緒の心持ちで楽しめる環境がくれたら、もう少し外貨を稼げるかもしれない。現在、着々と準備がすすむトレーラーキャンプの営業は今年四月からだ。

人材確保が一番の課題

いおうの場合、どのプロジェクトにもつきまとう苦勞が人手不足だ。例えばトレーラーのプロジェクトは、今別府氏が一人で準備しており、スピード感がほしい業務にも時間がかかる。大学生ボランティアの受け入れを紹介されることがあるが、そんなに単純な話ではないのが現実だ。

このプロジェクトは、二年前に今別府氏自身が企画をした。昨年、融資が決まり、いよいよ車の手配が始まった。まずはトレーラーを牽引する車を購入し、連結器をとりつけることから。一〇月に買い付けを開始、翌一月には牽引車で仙台へ片道二三時間かけて中古車両を受け取りに向かう。鹿児島へ戻って陸運局（自動車検査登録事務所）で名義変更し、二台目を受け取りに千葉へ。その後も福井、鹿児島県加治木町、埼玉、東京へと往復を繰り返している。牽引車の制限速度は時速八〇キロ。戻りはゆっくり走ってトレーラー内で睡眠をとる。さすがに快適だが、サービスイリアの長距離トラックが夜通しエンジンをかけているので耳栓が欠かせない。土砂降りの高速道路で凄惨な事故を立て続けに目撃し、不安になることもあったという。

長年放置してあった中古車両を個人から購入してしまい、

牽引中に不具合が生じたこともある。幸い、即座に配線をつなぎ直して事なきを得た。やはり、ディーラーの出品車両を買うほうがよく、安さと命を引き換える必要はない。

この一例をとってみても、「車の仕組みに詳しい」「アクシデントに臨機応変に対応」「長時間運転する集中力」「車中泊で休息できる」など、結局、「みしまⅡ」の船長としての経験や知識が豊富な今別府氏が適任になってしまう。

他の事業はまだ単純なので少しは人を雇えるが、業務が専門化するほど分業が難しくなる。複雑な作業をマニュアル化して利益を得るには、人員と資金に余裕が必要だ。これは小規模コミュニティを基盤とする組織が共通して抱える課題だろう。

雇用拡大について村からの要望も強いが、会社が事業を継続できるよう地道に準備を続けている状態だ。

新たな産業創出で描く未来

硫黄島は昭和、平成と、必ずしも時代の流れに追随してきたわけではない。人やものが大量に行き交うのに島は規模が小さすぎる。しかしいま、等身大の生き方を探す人もでてきており、そうした人々にいおうが居場所を提供できるのではないかと期待がある。

いおうの事業の成否が、島の将来を左右するのではない。基幹産業は畜産だが、島全体がひとつの産業で生計をたてていると、技術革新や環境変化によるダメージをもろ



日本の秘湯100選の東温泉。活火山のおかげで温泉が多い。



棚次 理 (たなつぐ おさむ)

1974年福岡生まれ。デザイナーとして国内で勤務の後、ドイツ・ベルリンに移住し活動。ドイツで硫黄島を知り、2017年に地域おこし協力隊として移住。現在はフリーのデザイナー、ライター、プランナー、株式会社いおうのスタッフとして働く。

に受けてしまう。かつての鉱業のように、多くの暮らしに影響を与えかねない。いおうの事業が安定すれば、結果として島に新しい産業を誕生させることになるだろう。

安永代表は、島に仕事がなく人口が流出する現状を危惧しており、「あきらめて何もしなければ、何も生まれない」と語る。その想いを受け、会社のロゴマークは、人が数字のゼロを押しつけて動かそうとする様子を図案化している。

「ないないづくし」で始まった株式会社いおう。長い道のりになるかもしれないが、できることからこつこつと取り組みを続けていく。

io

株式会社いおうのロゴマーク。